



東北育種場の平成29年度の取り組み

森林総合研究所 林木育種センター 東北育種場長 関 充利

1. はじめに

森林総合研究所の名称については、平成28年5月の森林法等の一部改正により、「国立研究開発法人森林総合研究所」から「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所」と今年度からなりました。よって、当場の正式名称は、「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所林木育種センター東北育種場」と、非常に長いものになりました。ただ、通称として、森林総合研究所林木育種センター東北育種場という名を使っていたことで差し支えありません。(写真1)

2. 東北育種基本区林木育種事業推進計画の策定

昨年度末に林野庁において策定された「森林・林業・木材産業分野の研究・技術開発戦略」を踏まえ、「東北育種基本区林木育種事業推進計画」が、林業研究・技術開発推進東北ブロック会議育種分科会の名前で策定されました。

この推進計画は、5年ごとに、林野庁の研究・技術開発戦略が策定されるのに併せて、東北育種基本区における林木育種の推進に関する基本的な事項について取りまとめられたものです。

具体的には、林木育種をめぐる情勢の変化及び林木育種の現状と課題が記述され、優良品種の開発、優良品種の普及、林木遺伝資源の収集・保存・評価等が記載されています。

3. 今年度の東北育種場の重点取組について

今年度の東北育種場の重点取組は以下の通りです。

①特定母樹の開発の取組

昨年度までの特定母樹の開発は、スギ36種類、カラマツ9種類の計45種類が大臣指定を受けたところです。スギ36種類の内訳は、第1世代精英樹から10種類、雪害抵抗性品種から8種類、第2世代精英樹から18種類です。カラマツ9種類は、すべて第2世代精英樹からなっています。

今年度については、引き続きカラマツの特定母樹の開発に取り組むとともに、スギ雪害抵抗性品種について、早期に採種園の造成に必要な9品種に達するよう開発に取り組んでいます。(写真2)

②マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発

現在のところ、東北育種基本区内では、アカマツ62品種、クロマツ47品種(日本海側33品種、太平洋側14品種)を開発しています。

マツノザイセンチュウ抵抗性品種は、津波や松くい虫等の被害を受けた海岸防災林の造成等に必要不可欠であり、遺伝的多様性を確保するためにもさらなる品種数の増大が必要と考えており、現在開発に精力的に取り組んでいます。

③林木遺伝資源の収集及び遺伝子銀行110番の取組みの推進

林木遺伝子の収集は、品種開発と並んで林木育種事業の柱の一つです、第4期中長期計画では、新需要が期待できる有用樹種について、重点的に林木遺伝資源の収集保存を行うこととしています。

また、林木遺伝子の収集保存の一環として行っている林木遺伝子銀行110番の取組についても、積極的に展開していくこととしています。



写真1 東北育種場正面



写真2 スギ第2世代精英樹候補木